

2019.12.07 # 医療・健康・食 # 週刊現代

知られざる「副作用」の恐怖~薬が5種類以上になると命の保証は…

薬が体内にたまると…悲惨な最期

∰ 週刊現代 プロフィール

いいね! **f** シェア 233 **y** ツイート **B!** ブックマーク 4

【②副作用が連鎖する】

薬の副作用が次々に現れ、命の危機につながることもある。

髙山孝典さん(71歳・仮名)の次男、隆夫さん(45歳・仮名)が語る。

「父は血が固まって詰まらないよう、一日1回、ワーファリンという薬を飲んでいたようです。今年の3月、がんの手術をし て、術後の痛みを和らげるため鎮痛剤(リリカ)も処方されていました」

出血が止まらない

事故が起きたのは、がんの手術から4日後のことだった。深夜3時、病院のベッドからトイレに向かう際、ふらついて転倒し、 頭部を強く打った。



「脳の表面で出血が起きる硬膜下血腫となり、後遺症で言語障害が残りました」(隆夫さん)

高山さんのケースでも「副作用の掛け算」が起きていた。

まず、転倒の原因になっためまいは、リリカの副作用だった可能性が高い。ただ、それだけなら、ここまで重症にはならなかった。

高山さんが飲んでいたワーファリンには血液をサラサラにする効果がある。その副作用が連鎖的に働き、出血がすぐに止まらず、命の危機に瀕したのだった。

【③薬が効きすぎる】

薬を処方した医者の判断を、何も考えずうのみにしてはいけない。過剰に強い薬を出されると、薬が効きすぎて危険な目にあう。

認知症の母親(82歳)の介護をしてきた三村仁子さん(55歳・仮名)が語る。

「母は2年前から食べる量も減り、外出もあまりしなくなりました。3ヵ月前に医者に連れていくと認知症と診断され、薬も出してもらいました」

三村さんの母親が処方されたのはメマリーという認知症治療薬だったが、薬は効かず、少しずつ量が増えていった。

「だんだん怒りやすくなり、夜に大声で叫ぶこともありました。お医者さんからはレミニールという薬も処方してもらい、合計6種類の薬を飲んでいました」(三村さん)

しかし状況は改善しない。三村さんの母親は、次第に起きてこなくなり、食事もとらず、とうとう三村さんは救急車を呼んだという。

一体、何が起きたのか。

実は、体の中に大量の薬が残った結果、レミニールが効きすぎて、気分を落ち着けるはずが意識障害に陥ったのだ。

そもそも、「怒りやすくなる」という症状は、それまで飲んでいたメマリーの副作用だった。それに気づかずに、医者は追加 の薬を出してしまっていた。誤った判断で薬が増やされ、命を縮めたのである。



< 1 2 3 >

ジ 記事をツイート

■ 記事をシェア

B記事をブックマーク



固定電話が「巨大なリスク」になっていることに気づいていますか(加谷…





「朝バナナやめる人続出」春日の減量が 凄い





山口百恵さんが、40年ぶりの「写真集」 に込めた家族への愛情(高堀 冬彦)…

@gendai_biz